

はじめに

地球環境サミット「環境と開発に関する国連会議」が、ブラジルで開催されたのは 1992 年のことでした。地球レベルの環境問題をテーマにしたこの会議で、キーワードとなったのが sustainable development でした。sustainable は「持続可能な」と訳され、ちょっとした流行語となりました。これに数年先行して、かねてより環境問題を重視していたトヨタ自動車株式会社は、自社生産物である自動車の生産・利用・廃棄のすべての段階において環境悪化阻止対策を進めることを標榜した「トータルクリーン」のスローガンを掲げました。

トータルクリーンは、自動車に関連することのみならず、その一貫として、植物の緑による環境の改善と自然との共生を目指した「環境緑化プログラム」が発想されました。その具体的な事業として、環境改善に自然界の力を活用する方策を模索する「トヨタの森・フォレストヒルズ」が生まれました。それは 1992 年から 1997 年にかけて整備がすすめられ、一応の整備完了をみた 1998 年から総合的な本格的業務がスタートしました。

そして、2007 年、トヨタの森・フォレストヒルズは 10 周年を迎えました。11 月 9～10 日には、10 周年記念のセレモニー等のイベントが開催されました。10 年といえば一区切りですが、自然相手の仕事では、まだそれは緒についたばかりというべきかもしれません。

この報告書は、そのフォレストヒルズ第 10 年目、2007 年度の観測記録です。これから将来に渡って、長期間継続していくトヨタの森・フォレストヒルズの、初期のデータベースとして、この報告書は重要です。この報告書では、10 年という一区切りの齢の報告書でもあり、この 10 年間を総括する意味で、「森を見つめ観直す トヨタの森から」と題する章を第 1 章として設けました。

その章の中の、1997 年、トヨタ自動車株式会社主催「里山ルネッサンス」の記事に、トヨタ「杜の会」からの提案 4 項目の記載があり、「3) 長期定点観測を行う里山の確保」と表示されています。この提案項目は、観測資料蓄積と試験研究地としての活用による保全、すなわち、長期のエコモニタリングを実施して観測資料が蓄積されると同時に、モニタリングのフィールドとなっているおかげで、開発等の圧力から免れる、という意味を持っています。

その提案が実現したものが、フォレストヒルズモデル林のエコモニタリングです。

フォレストヒルズモデル林、それはトヨタ自動車株式会社が新しい時代の社会に向かって率先して開いた、一種のショールームなのです。